香取遺産 vol.164

赤れんがは語る

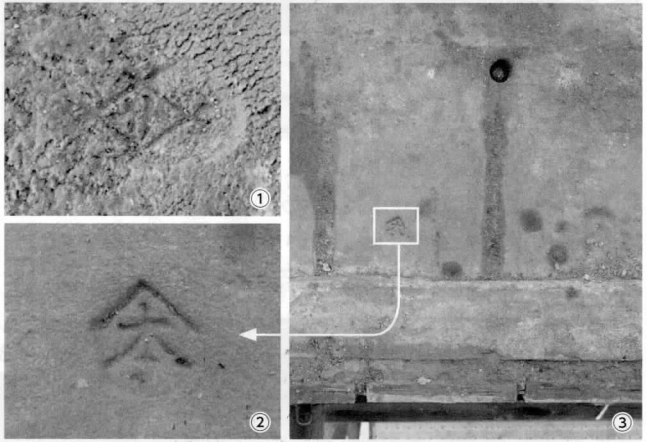
佐原三菱館の保存修理工事が昨年から始まり、れんが壁内に、耐震補強のための鋼棒を挿し込む穴を開ける作業が終了しました。穴を開けるための工具を据え付けるために屋根の一部を解体したところ、積み上げられた一番上のれんがに刻印（こくいん）が見つかりました。

れんがの刻印には、会社名や平仮名、カタカナ、「☆」「○」といった記号、アルファベットなどが用いられ、れんがの長手面に押されます。長手面は積み重ねる面になるので、完成された建物では、なかなか見つけることができません。

慎重に調査を進めていくと、佐原三菱館では、数カ所のれんがから2種類の刻印が確認できました。一つ目の刻印は、写真①のひし形にした井桁の中にカタカナの「サ」の字があるもの。二つ目の刻印は、写真②の「へ」の下に「本」の字があるもので、「山本」と解釈できます。佐原三菱館のれんがは、イギリスから輸入されたものとされてきましたが、これらの刻印から、日本国内で焼かれたれんがであることが分かりました。

れんがの刻印は種類が多く、同じデザインの刻印を複数のれんが製造会社で使用しているため、製造場所を特定するには至っていません。しかし、化粧タイルに覆われた大正時代の赤れんがが、静かにその生い立ちを語り始めました。

問 生涯学習課　☎(50)1224



①「サ」に「サ」の字の刻印　②「余」の刻印　③あらわになったれんが壁の頂部（真上から撮影）。写真下が県道側、化粧タイルが貼られている